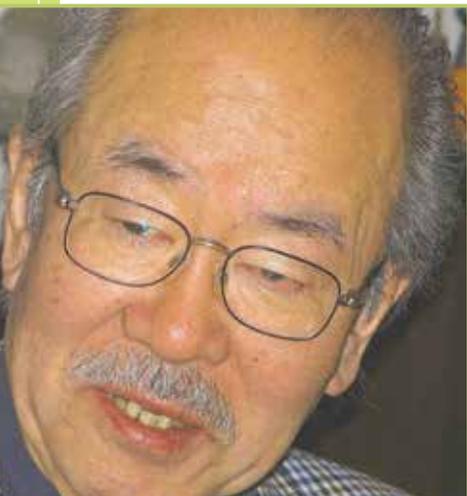


園田高弘 先生



園田高弘 先生

レオ・シロタ、マルグリット・ロン、ヘルムート・ロロフの各氏に師事。1954年、初来日となったカラヤンとNHK交響楽団との協演をはじめ、国内外で創造的な演奏活動が続いている。特にバッハからシェーンベルクに至るドイツ音楽では第一人者として高い評価を受け、3回にわたる「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集」の録音は、世界的な偉業と評されている。1993年にはミュンヘン・コンクールの審査委員長を務めたほか、ショパン・コンクール、チャイコフスキー・コンクールなど、世界の著名な音楽コンクールに審査員として度々招かれている。1985年以来、大分市で園田高弘賞ピアノ・コンクールを開催し、新進の発掘にも寄与。日本芸術院会員。1997年サントリー音楽賞、1998年文化功労者顕彰受章。

方法論から脱却する

(福田成康専務理事 以下福田)：

昨年11月の「第18回園田高弘賞ピアノコンクール」では、ピティナでおなじみの田村響君が、見事第1位の成績を収めました。田村君は、昨年のピティナ・ピアノコンペティション特級に出場し、史上最年少(高校1年)でグランプリを受

今号では、新春専務理事特別対談として、園田高弘先生のご自宅にお邪魔してお話をうかがった。グランドピアノ4台が置かれたレッスン室がまず圧巻。バックハウス・ケンプ・フルトヴェングラー・チェリビダッケなどの大家と現地でリアルタイムに接してきた74歳の巨匠は、さらなる芸術の高みを求め、あくまで自然体で歩み続ける。

取材日:2003年1月10日(金) 記事:堀明久

賞したばかりですが、田村君の演奏を、どのようにお感じになりましたか？

(園田高弘先生 以下園田)：出だしの2秒を聴いたところで、これはすごい、本物だと思いました。私のレコードを研究したのではないかと思うくらい(笑)。百戦錬磨の審査員と、日本も捨てたものじゃない、と語り合ったのを覚えています。過去18回のコンクールを通じて、最高の演奏者だと思いました。

次に目指すは世界ですね。勉強の仕方としては、コンチェルトなどレパートリーを増やし、リサイタルのプログラムをいくつも広げていくうちに、自分が本当にやりたいことが見えてくると思います。じっくり勉強して大きく育つよう、周りが配慮する必要がありますね。

福田：その指導のポイントは何だったとお思いですか？

園田：コンクールの時点では、クラウディオ・ソアレス先生が教えていらっしゃる

ことは知らなかったのですが、演奏を聴いて、日本人の先生ではないと感じていました。だいたい模倣から入るのが芸術ですが、田村君の場合、教わったものが消化されて出てくる。意図があって弾いている感じではない、教え込まれたものではない。どこからこのような才能が彼に移ったのか、知りたくなりました。ハンス・ライグラー先生の一番いい時の指導をソアレス先生が伝承し、その純粋な部分だけが、田村君に受け継がれています。理想的なかたちで芸術が継承されているのです。方法論ではだめなのです。教師はそう思っているかもしれないが、他の人は全然共感していない、ということも多いでしょう。ここをこう弾いたらこうなる、ここはあわせてここは強く弾くとか、そういう音楽教育だけが行われてきたことが日本の限界なのでしょうね。だからそれ以外のところで才能が伸びてくるわけです。「一体芸術とは何なのか？」ということに関して講演してくれるような人を探して

くることがよいのではないのでしょうか？

福田：たしかに、今までの講習会は、「どう弾くか」など、指導法そのものに関する内容が圧倒的に多かったです。

園田：良い講師はたくさんいらっしゃると思いますが、日本に名指して売り込んでいく外国人は、ほぼ全部ダメだと思っていますね。ソアレス先生は、面白いと思います。自分がどうやって勉強されたのか聞くことで、いろいろとヒントが生まれるかも知れません。ライグラフ先生からソアレス先生に何が伝わったのか、ソアレス先生が田村君に何を語ったのか、興味があります。レッスンは限られた時間であるはずなので、方

法論ではないはず。田村君は15歳だから、無意識に受けているのだと思います。それが重要であり、ある意味、おそろしいこと。

福田：ピティナの指導者にも、方法論のアプローチから入る方はいらっしゃると思いますが、一樣に、きわめて熱心です。ヨーロッパに行くと、フランスのピアノの指導者協会は100名くらいとか、メンバーが激減しているのが現状。このままなら、日本から世界に出ていく人材が登場できる気がするのですが、「日本人に海外で活躍して欲しい」という願いを、どのように導くのがよいのでしょうか？

少なくとも、園田先生ご自身の体験としては、どのようにお考えでしょうか？

園田：たとえばヨーロッパでは、音楽以外の学術とか基本的な教養の厚みが、全然違うのです。弁護士が音楽・芸術・絵画について精通しているとか、医者がヴァイオリンを弾くとか、ベルリンやパリには、そのような人たちが集積しています。あくまで人間そのものが問題なので、人間性を豊かにすることが芸術の豊かさにもつながるといえることなのでしょう。

福田：教養という単語ひとつをとっても、ヨーロッパの人は本当に好きで話している感じがしますよね。日本で教養と言った場合、知っていることが偉いとか、装飾品の代わりになってしまっています。同じように知識があっても、大変な違いです。最近、事務所内で始め





た「即興劇」の研修には、ピアニストや指導者の先生にも参加していただいています。教養を広げる一環だと思っています。先生のお話をうかがって、やはり、人的環境を向上させ音楽以外の教養人との触れ合いを増やすことは必至と感じました。そもそも、自分がより良く楽しく生きるための素材を探ることが、基本スタンスだと思いますし。

園田：人間生活は教養をひけらかすためにあるのではなく、自然な状態であるということ。教養の話をする場合に、構えてしまう。音楽家にはこのことを自覚して勉強してもらわないといけないと思います。特に、出来る人に限って出来るという意識が身につけてしまっている。さらには、トップの人どうしがもっと交わって話をしないと社会はよくなっていかないでしょう。日本人のDNAには、社交性が欠けていますね。

福田：「私の履歴書」（日本経済新聞）など、園田先生の執筆されたものを読むにつけ、「変に構えていない」というか、園田先生がすごく自然に歩まれてこられたことがわかります。このような方がクラシック界には少ない。格好つけるかコンプレックスの塊か、という感じで……。

園田：後学の国なので、コンプレックスというのはよくわかります。が、構えるというのは嘘だと思います。自分に対して真実でないから構えるのでしょうか。できないものはできない、知らないものは知らないのです。そこで習う気持ちがあれば、外国は本当に楽しいです。いくらでも勉強することができるのです。些細なことで言うなら、はじめて海外に出たとき、「コーヒーも飲まずにヨーロッパがわかるのか」などと言われました。その頃はお酒も飲めなかったのですが。

というのがよくわかります。多くの人は、なるために勉強したり努力したりしますが、園田先生の場合、そのような状態になることが目的ではなくて、追い求めていることそのものが尊いとお感じなのではないでしょうか？ ゆえに限りが無いというか引退が無いというか……

園田：済んだことには興味が無いのです。いま目前にあるものを、今度こそはもっと追求してやろうと思っています。学校を卒業したての頃はうぬぼれていたのですが、自分の目標などはすぐ目の前にあると思っていました。それが、勉強していくに従ってだんだん遠ざかっていくというか、これは大変なことだということに気づいたわけです。外国のレッスンでは、初回のレッスンから暗譜で弾かなければなりません。一通り聴いてくれた後で、土台の曲がついている部分からひとつずつ指摘されます。最初の頃は、音符を正確に読んで正確に弾けば出来上がると思って



巨匠は前進する

福田：74歳でバリバリの現役と

いたが、そうでないことに気づいた。まずは、いったい作曲家がどのようにして作ったのか、出来上がった作品で何を伝えたかったのかを知る必要があります。さらに、ただ単純に伝えるのではなく、演奏を通じて、自分の意見を言わなければならない。作曲家と自分の、ギリギリの対話の中から生まれてくる演奏——。写真家にも通じるものがありますね。

福田：多くの方は、園田先生は、近寄りたく高いところにいるらしい巨匠、というイメージを持っているのではないかと思います。実際にこうやってお会いしてみると実に自然な感じですね。誰よりも求め続けているからこそ巨匠なのだという認識を、多くの人に伝えていきたいものです。いずれにしても、ギリギリのエッセンスというのは、文字になるものではなくて、人から人へ直接伝わることですね。教育の現場では、どうやってそのような機会を作るのがよいのでしょうか？

園田：動物の親子の刷り込みではないけれども、教育も、

生涯のうち何時間しか会わなかった人に大きな感銘を受けることがあります。音楽会も1回しか聞かなかったのに絶大な影響力を持っていたりします。私の場合、フルトヴェングラーの実演にはパリで2回しか接していませんが、生涯忘れ得ぬ刷り込みになったわけです。その後、チェリビダッケと会い、長いこと付き合いがありました。ドイツ語がうまく話せなかった私に「おまえの考えていることは話さなくともわかる」と言われて驚いたことを覚えています。フルトヴェングラーとかチェリビダッケは、「音楽は現象である」という考え方でした。一回性のもので、再現をたどるのはあまり意味がないということ。一回性というところに芸術の生命を賭けるのが演奏ということですね。

福田：まさにライブということですね。では、これからのピアノ教育に対する思いを、お聞かせいただきたいのですが。

園田：田村君の登場で、ピアノに対して畏敬の念を持つ方が現れたことが、最大の成果ではないかと思います。

また、私の紹介している「旬のピアニストシリーズ」などを通じて、若い人も欧米スタイルに近づき、育ってきた感じがします。目標は自分で苦勞して探し出すもの。混沌とした世界から探し求めてはじめて目標が出てくる。書かれたものは目の前にあるが、本当に目標になるのかどうか、ザルで水をくむようなことをしていてもだめ。人間だれにも得手不得手があるので、それを克服していくこと。手をこまねいていいかげんにやって、どうにかなるだろうと言っているのも何にもならない。汗水流してとことんまで突き詰めていかなければならない。そうやって、香り高い崇高な芸術に少しでも近づくことができれば、本当に幸せなことだと思います。

福田：今日は、園田先生のありのままのお考えをうかがうことで、自分たちの基本姿勢を確認することができました。ありがとうございました。



CD 情報

Takahiro Sonoda in seiner Jugend

「園田高弘 若き日の軌跡」I～IV

発売：株式会社ハイブランド

定価：各 2,500 円

「園田高弘賞ピアノコンクール」
「旬のピアニストシリーズ」等の
詳細は、園田高弘先生の公式
サイトをご覧ください。

<http://www.music.co.jp/~evica/>